

せ と る C. E. T. L. Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.20

発行日 17. Jul. 2005

巻頭言 総合科目という試み

教務部長 山崎 純一

筆者は、10年にわたって、「現代マスコミ論」という総合科目のコーディネーターを勤めてきた。本稿では、この科目の授業実践を報告し、皆様のご意見を仰ぎたい。

大学の授業には講義、演習、実験、実習、実技などさまざまな種類があるが、大半の授業は、教員がある授業をひとりで運営している。この方式は今後もある程度、一般的な形であり続けるであろう。その一方で、異なる方式の授業の試みも展開されてきた。そのひとつが、何人かの教員がひとつの授業を受け継いでいく、いわゆるリレー授業、本学では総合科目と呼ばれている授業である。

総合科目「現代マスコミ論」では、毎回、学内外からジャーナリストやマスコミ研究者を招いての授業が行われている。その中で実感してきたのは、ある程度一貫したテーマや方針で授業運営をする必要があることである。そうでないと、学生の勉学あるいは勉学への動機付けとしても、この種の授業は必ずしも十分な成果をあげられないことである。そうした反省に基づいて、以下のような方針で授業を運営している。

第1に、講師に授業のねらい、話してもらいたいことを明確に指定している。自由に話して下さいということにすると、ともすると放談に近くなり、毎回それを聞かねばならない学生は、まとまりのない内容に勉学の意欲を喪失しがちである。

第2に、講師には事前に学生に読ませるべき資料を指定してもらい、授業の前の週に学生に配布している。講師には、学生はその資料を読んできているという前提で授業をしてもらう。それは、学生に授業の準備をさせ、授業への感度を高めるためである。

第3に、講師には、それまでのレジュメなどを渡すことで、それ以前の授業の内容を知ってもらう。直接的には、授業内容の重複を避けるためであるが、自分の話が全体の流れの中でどんな位置づけにあるかを考えた上で、授業をしてもらうためである。

第4に、コーディネーターは原則として毎回の授業に参加し、授業終了直前の質疑応答の司会を務める。しかし、単なる司会ではなく、積極的に質問をし、コメントを述べ、時には講師

と議論を交わす。学生をそうした議論の現場に直面させることで、いかなる権威の話でも相対可能であることを認識させ、知的探求の世界に進ませることがその目的である。コーディネーターが出席できない場合は、TAにその役割をお願いすることもある。

第5に、学生には、授業のたびに、出席カードの裏に感想を書いてもらい、講師に渡している。毎年招聘する講師が多いために、次回の授業の参考にしてもらうためである。

第6に、試験は、すべての講師の授業から択一式の問題を、その他に全体のテーマについての記述式問題を出す。そのため学生は毎回の内容を把握して試験に臨まねばならない。

この種の授業は、とにかく現場の人に話してもらえば良いということで、内容が散漫になりがちである。学生に意味のある授業をするためには、上述のように、一貫性とコミュニケーションが必要である。ある総合科目では、初回と最終回に全講師が集合してミニ・シンポジウムを開催したり、いわゆる講義と学生を3-4人のグループに分けてのディスカッション・セッションを交代で行ったりと、さまざまな試みがなされている。

「学生のための大学」とは、より知的興奮に満ちた授業が日々展開されている大学であろう。そのために今後も努力を続ける所存である。皆様のご教示を心よりお願い願う次第である。

FD講演会——「大学教育のグランドデザイン——『我が国の高等教育の将来像』と私立大学」を開催

5月24日（火）、本学A棟においてFD講演会が開催された（主催：全学企画調査委員会／共催：教育・学習活動支援センター）。金子元久教授（東京大学大学院）を講師に迎え、「大学教育のグランドデザイン——『我が国の高等教育の将来像』と私立大学」をテーマに、高等教育の現状と将来について貴重なご意見を頂戴した。これには100名ほどの教職員が参加した。

講演では、本年1月に公表された「我が国の高等教育の将来像」の概要が解説され、高等教育のユニバーサル化や高等教育の市場化の問題点などについて論及された。講演終了後には、大学の財政戦略や意思決定プロセスなどについて、

活発な質疑応答が交わされた。

なお、講演の様子はCETLのビデオ・ライブラリーにて視聴できる。



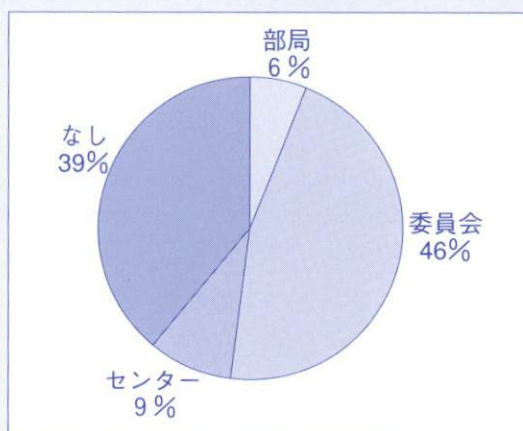
講演中の金子元久教授

学生参加型授業に関するアンケート調査の結果速報

現在、大学生の学力ならびに学習意欲の低下は大学教育の深刻な問題である。その対策の一つとして、学生に積極的な学習を促す参加型あるいは双方向型授業が注目されている。特に近年、授業アンケートなど学生による授業評価を通じて、授業改善への学生参加を促す試みが広がっている。しかしながら、参加型授業と一口にいても実態は多様であり、その授業形態・教授法について教員間に共通認識が形成されているとは言い難い状況にある。

そこで、教育・学習活動支援センターでは本年1月から3月にかけて、「学生参加型授業に関するアンケート調査」と題する全国調査を行い、参加型授業の実施状況の把握を試みた（882の大学に依頼し、有効回答数221、回収率25.1%）。

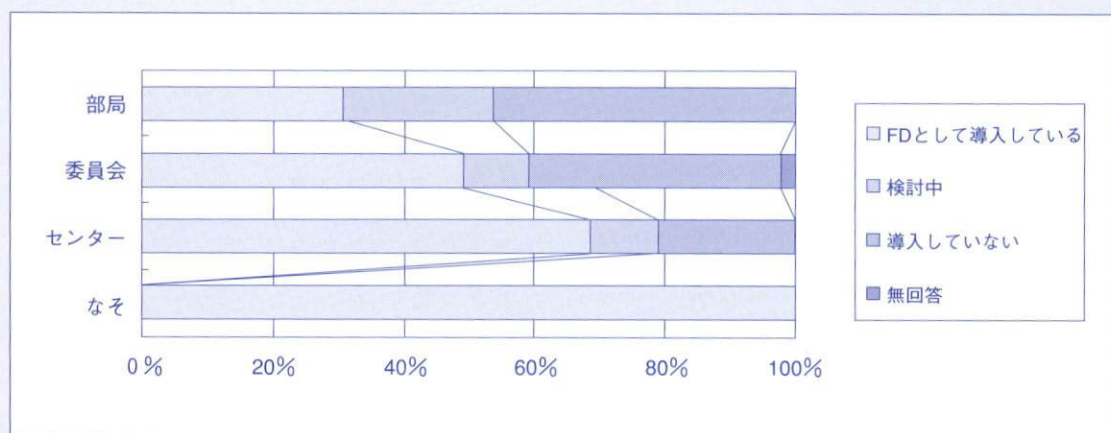
まず、参加型授業の導入を組織的に進める上で、どのような組織形態がとられているのか、確認してみた（グラフ1参照）。



グラフ1 FDを担当する組織の有無とその形態

萩国際大学の民事再生法申請などに象徴されるように、大学冬の時代が到来している今、大学が自らの教育力向上に力を入れるのは必然であろう。その中で、組織的な授業改善（FD）に取り組む状況にない大学が少なからずあることは意外である。定員割れに直面し、授業改善の余力を失っている大学もあるのだろうか。

次に、組織形態の違いと参加型授業導入の取り組みとの関係を検討した（グラフ2参照）。



グラフ2 FD組織と参加型授業導入の関係

FD推進主体としては、委員会方式（46%）が最も多く、次いでセンター方式（9%）、部局

（職員サイド）方式（6%）の順になっているが、参加型授業への関心度はセンター方式を採って

いる大学が最も高くなっている（検討中を含めれば80%に近い）。センターという独立した組織を立ち上げてまでFDを進めようという意識の高い大学の方が、参加型授業の導入には積極的な

ことがわかる。

では、参加型授業を導入・推奨するために、どのような支援方策がとられているのか、具体的なFD活動を調べた。

表1 「参加型」を導入している大学の取組み方（回答該当者数65件）

	授業法導入・普及への取組み方	%
イ	学外講師による講演会・ワークショップ	52.31
ロ	学内講師による講演会・ワークショップ	50.77
ハ	授業見学会（参観後の検討会あり）	21.54
ニ	授業見学会（参観後の検討会なし）	21.54
ホ	同僚評価の実施	4.62
ヘ	学外機関主催のものへの派遣	47.69
ト	通信システムを利用した実施	3.08
チ	組織単位での合宿研修	16.92
リ	専門家による個別コンサルテーションの提供	3.08
ヌ	教員相互の授業改善に関する自由な場の提供	40.00

本学では、参加型の授業方法を導入・推奨するにあたり、特に協同学習法（参加型教授法の一つに分類される）のワークショップを数多く実施してきた。その際、学内外から講師を招き、海外の関連ワークショップに教員を派遣することも行っている。表が示す代表的な3つのFD活動を本学も行っている。さらに、授業見学会や

教育サロンという形で、授業方法に関する情報交流を積み重ねており、表に示された取組みの大半を実施している。本学がFD活動に関して、積極的なことが伺える。

もう一つ、参加型授業方法を導入していない大学の特徴について、分析を行った。

表2 導入していない大学への追問（回答該当者数131件）

	導入していない理由	%
1	授業方法は各教員の判断に任せている	19.85
2	参加型導入の可否を検討する段階にいたっていない	28.24
3	導入には関心がない	6.87
4	その他	2.29
0	無回答	42.75
	合計	100.00

参加型授業の導入・推奨を考えない大学の内、明確に必要性を認めていない大学は7%と少ない。むしろ、教授方法は教員に任せているために組織的な導入や推奨は控えている、という大学が約20%、導入を検討する段階までFD活動が進んでいない大学が28%となっている。こうした大学のFD活動が拡充していけば、参加型授業方法を全学的なレベルで導入している大学の比

率は増していくであろう。

創価大学が積極的に進めてきた学生参加型授業の導入は、全国的な流れとなつて本格化していくと見て間違いあるまい。そうになると、いよいよその実質が問われる段階となる。CETLとしても、より実効あるワークショップや授業支援を検討していきたい。

新入生向けのレポートの書き方ワークショップを開催

5月27日、A406教室にてCETL主催のレポート講習会が開催された。毎年恒例となりつつあるこの講習会はレポートの書き方を通し、学生が学習に対しての積極的な態度や適切な方法を身につけられるようにとの目的から開催されている。今回も100名近くもの学生たちが集い、講師の話に熱心に聴き入っていた。



レポートの書き方を解説する清水センター員

今回は、「レポートとは何か」「どのような態度で臨めばよいのか」といった基本的な話からはじまった。出題の意図を理解すること、学ぶ喜びを得られるような調査の行い方等、レポー

トのみに限定されるものではなく、大学における学問そのものの基本的な考え方を踏まえつつ、具体的に説明を行った。さらに内容は高い評価を得る論理構造とはどのようなものかといった原理的なものから、レポートの書式や体裁についてなど、より具体的なものまで多岐にわたった。抽象的な話にとどまらず、具体例を豊富にともなった内容に対して学生たちの反応もよかった。

終了後に回収されたアンケートには、「誤りだらけのレポートをこれまで書いていたことがわかりました。とても参考になりました」「とても親切に教えていただき、勉強になりました」との感想が数多く寄せられ、今回の講習会が成功裡に終わったことを物語っている。しかしながら同時に、「授業の受け方やノートの取り方を教えてほしい」「予習・復習の効果的な方法を教えてほしい」など、毎年CETL主催にて（新入生対象ではあるにせよ）開催されている学習法ガイダンスの存在を知らないためと見受けられるコ

メントもいくつかあり、より広範な告知活動の必要を感じさせられた。「3年生なので来るのに少しとまどいはあったが来てよかった」との声もあり、今後も学生たちにより広く開かれた各種ガイダンスをおこなってゆきたいと考える。

さらに、「効果的なプレゼンテーションのやり方」や「卒業論文について」などの企画もレポート講習会と同様にCETLで行ってほしいとの声もあり、学生たちの意欲を感じることできた有意義な講習会となった。

Information

- ・ 8月3（水）～5（金）日に、私大連の研修会が開催されます。CETLからは、木下薫先生（文学部）と董芳勝先生（教育学部）が参加されます。
- ・ 7月18（月）～22日（金）に、「スペンサー・ケーガンの協同学習研修会」がアメリカ・フロリダにて開催されます。尾崎秀夫先生（WLC）とビクター桑原先生（教育学部）が参加されます。
- ・ 2005年後期のCETLの窓口業務は9月15日（木）からはじまります。時間帯はこれまでの通り、12時30分～17時となります。
- ・ 院生スタッフの佐藤秀史さんが、前期終了をもってCETLの業務を終えます。主にCETL数学講習会の講師として尽力してくれました。最後に一言いただきました。

「前期数学講習会を担当させていただいた佐藤秀史と申します。講習会が始まって間もない頃は、当初の想定と実際の学生さんの学力やニーズとの差に戸惑うこともありましたが、無事前期の講習会を終えることができました。センターでは、数学講習会のように純粋な数学のみならず、経済原論等に適用されている数学についての質問もありました。そのような中、CETLは、学生と授業や学習活動との間のギャップを縮める助けができる場所であると改めて感じました。最後になりますが、坂本センター長をはじめCETLの皆様方に大変にお世話になりました。また、沢山の貴重な経験をさせていただくことができました。本当にありがとうございました。」

編集後記

少子化時代を迎え、各大学の提示する将来像や教育システムがこれまで以上に問われるようになってきているのを痛感いたします。同時にそれは個々の学生を大切にすることでもあると感じました。(S)

C. E. T. L. Quarterly No. 20

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel : 0426 (91) 9782 内線 2146

E-mail : cetl@soka.ac.jp